

パネルディスカッション 要旨

(田中)

本日は連休の中日にも関わらず、これだけの方々にご参加いただき、新庁舎建設に対する関心の高さを非常に感じています。休憩時間中に回収した意見票については、現在50枚くらいで、先ほど廊下を見たところ、まだまだ出しているようになので、この会場の3分の1近くの方が出してくれたと思います。目を通して進めていきたいと思いますが、数が多いので全部に触れることができないことだけご了承ください。

パネラーとして登壇している設計者と市長の3名は前半でお話いただいたので、紹介は省略します。パネラーとしてもう1人、工学院大学の名誉教授で、府中市新庁舎建設設計者選定委員会の委員長を務めた倉田直道氏にお願いしています。

本日のシンポジウムは、前半の基調講演でも話がありましたが、新しい府中市の庁舎の姿について、どんな庁舎が府中市らしいのか、相応しいのかを考える機会にしたいと考えています。市長からも単なる庁舎の建替えではなく、府中の未来を担う庁舎を、未来をつくるという話がありました。そういう形の庁舎をつくる人を決めるために、提案を含むかたちで設計者を選定するプロポーザルを実施して今日に至るわけですが、まず、倉田氏から、今回のプロポーザルの特徴や、どういうことを考えながら審査を行ったのか、今回最優秀者に選ばれた案の評価したポイントなどについて、お話しください。

(倉田)

今回のプロポーザルで設計者を選びましたが、私自身、設計者の選定以前、基本構想をつくる際からお手伝いをさせていただいていました。そういう意味では、ずっとこれまでのプロセスを見てきましたが、今回の庁舎の建設については、庁舎自体がこれからの庁舎として市民に開かれた庁舎を造ろうということと同時に、建築の計画においても、市民に開かれたプロセスで、設計者選定や計画づくりを進めていくということだったと思っています。

意見票にもありましたが、プロポーザルという言葉自体分かりにくいかもしれませんが、プロポーザルは案を固定してしまうのではなく、アイデアを含めて設計者を選定するということです。今日紹介された案は、これを一つのたたき台にして、日ごろ利用する市の職員や市民も含めて色々議論を進めながら、建替えるということです。

設計者の選定について、今回、参加申込が39者、そのうち33者から提案

書の提出があり、非常に幅の広い、アイデア豊かな提案がありました。プロポーザルにおいて庁舎に求めたものは非常に幅広く、先ず、庁舎で業務を行う職員にとって働きやすい執務環境や、利用する市民にとっても行き届いた行政サービスの提供の場ということがありました。それ以上に、市民に開かれた、市民に親しまれる庁舎ということがありました。その意味で、庁舎自体は行政と市民を繋ぐ非常に大事な場でもあるということになると思います。それと同時に、今回、防災や、市民との協働の場としての庁舎と、大國魂神社に隣接する現庁舎の建替えが非常に大きいテーマだったと考えています。計画をつくる過程においても、市民からも現在の場所で建替えてほしいというご意見が非常に多く、それだけあの場所が特別な場所であったということになります。現庁舎を使いながら建替えるということで、技術的にも非常に難しいところがあり、今回の提案では、建替えのアイデアも求めました。多様な課題に対して、多くの提案をしてもらいましたが、非常に魅力的な提案が多く、審査委員としても初めはどれを選んで良いかという状況もありましたが、結果としては、今話した課題に対して、的確な解を提案していただいた設計者が選定されたと思っています。

色々議論があり、最後の決め手という言い方は悪いかもしれませんが、次の時代に相応しい庁舎のあり方、市民協働の場の庁舎、市民に開かれた庁舎というものをどういう風に受け止めて形にしたかということがポイントでした。もう一つは、立地環境をどのように活かして府中らしい庁舎を提案しているかということが大きなポイントだったと考えています。提案内容は設計者から説明がありましたので、魅力やアイデアの素晴らしさをご理解いただいたと思いますが、この提案に対し、これから行政や市民がどうやって使っていくかということが非常に重要であり、最終的に、皆さんにこの施設をどのように使ってもらえるかということで本当の評価が決まると考えています。最優秀案はそういう可能性を秘めた提案であるということで、大げさな言い方になるかもしれませんが、これからの時代の新しい庁舎の一つのモデルを提案していただいたと考えています。そういう意味で、府中から新しい情報発信が、市民の活動も含めて、この場を通して行われれば良いなと思っています。そういった期待を込めて、今回の案を選定しました。

詳しい内容は、既に設計者から紹介があったので、特に申しあげることはありませんが、そのような提案が選定されたということは、審査委員会としても非常に良かったと思っております。全ての審査員による満場一致ということもあり、我々も自信を持って、皆さんにご報告させてもらいたいと思っています。

(田中)

ありがとうございました。私も委員の一員で審査にも携わり、特に7月に行われた公開プレゼンテーションのときには、大変多くの市民の方に来ていただきました。我々は候補者の案や模型を間近で見ることができましたが、市民の方はなかなか近くで見ることができませんでした。今回は会場後方で見ることができますので、倉田氏から説明のありました評価したポイントや魅力についても、より深く模型を見て分かっていただけだと思います。

これからの時間は、いただいた意見や質問を交えて、少し設計者の方に説明等を付け加えていただいて、議論を進めていきます。

まず最初に皆さんとお話をしたいのが、府中らしい庁舎のあり方はどういうものかについてです。庁舎には色々な役割がありますが、まずは日常的に市民に行政サービスを提供する場です。また、先ほど市民の方が用事がなくとも来なくなる庁舎という話がありましたが、地域に開かれた庁舎のあり方も含めて、まず普段の庁舎の使われ方、あり方について話をしたいと思います。皆さんからいただいた意見は、今見ていると、新庁舎が各地で作られていますが、府中らしさを一番アピールするポイントはなにか、という質問や、府中の街の特徴を一言で表すとなにか、そういうことを踏まえて、府中の未来や発展は庁舎のどういうところに現れるのか、という質問をいただいています。府中の愛着のある、市民が集まる、世界への発信を行うという点で、どういうことを庁舎のなかにポイントとしてつくっていききたいかについて伺いたいという質問もいただいています。これらの質問の延長線上として、大國魂神社との調和や、環境をどういう風に配慮するのかについても意見を多数いただいていますので、これらの点について設計者の2人に今までの説明に少し付け加えてお話したいと思います。

(上田)

今回の庁舎の特徴はなんといっても、おもやとはなれ、その間に通り庭があり、それらを繋いでいる構成が非常に新しい構成であると考えています。府中駅と府中本町駅を繋ぐ、回廊性のあるイメージとなってくると思いますので、これが今回の特徴であると思っています。特にそこにけやきを植えたり、開かれた、透明感のあるスペースを設けたりすることで賑わいが生まれるということが特徴になると思っています。

(千葉)

先ほどの説明と重複するかもしれませんが、建築家のフランク・ロイド・ラ

イトという人が残した言葉を一つ紹介したいと思います。それは、「その建築ができるまで、そこが素晴らしい場所であるとは誰も気づかなかった。」というものです。建築の役割は、その建物自体のデザインが素晴らしいということ以上に、その建物ができることによって、どれだけその地域の魅力を引き出すことができるかということにあると思っています。今回の提案には、「おもや」と「はなれ」、「通り庭」という大切な要素がありますが、これができることによって、府中本町駅から大國魂神社を抜けて府中駅に至るという経路は、もっと魅力的な場になると考えています。もちろん今現在も豊かな自然に包まれた、十分に魅力的な場所ですが、それがこの建築によってさらに引き立つのではないかと考えたのです。もう一つ、何度か府中を訪れる中で印象深かったことは、確か週末でしたが、市民の方々が公園をはじめとする様々な公共空間を実にうまく使っていることでした。特に子どもたちが遊んでいる姿は、大変生き生きとしていて素晴らしいものでした。そこが府中の最大の魅力でもある。その意味で、この建築が、こうした市民活動の背景になれば良いのではないかと考えました。

(田中)

少し補足で伺います。今回選定されて色々お祝いを受けた、敷地を誉める意見も多かった、という話を先ほど楽屋で伺いました。大國魂神社の隣にあり、歴史的な資源があるというなかで、通り庭の両端におもやとはなれが提案されています。はなれという空間は、市民との協働の場という位置づけになっています。市民活動の場は別に用意されることになっていますが、庁舎では、どういう活動がこれから展開されることを期待されるのか。あるいは、これは設計を進めていく過程で市民の方と話をしながら進めていくことだと思いますが、現在今後の発展の中でどういうことを期待されているかを伺いたいと思います。

(千葉)

田中氏のおっしゃるように、今回多くの方からお祝いをいただきました。ただ、素晴らしい建築だと言われるよりも、素晴らしい敷地だと言われることの方が多かった（笑）。一時期庁舎を郊外に移転させる決断を下した自治体は、数多くあったわけです。中心部は商業施設として活性化させようと。その動きに対する揺り戻しもあるなかで、街の中心で庁舎を建てられるということは最大の強みだと思います。庁舎としての働きやすさはもちろん大切ですが、同時に行政に様々な形で市民の方も関わっていく、そういう場が街の中心にあることは、大きな可能性を秘めています。府中にたくさんある公共施設のサテライト

として使ってみたり、あるいは最近だとラグビーが盛り上がっていますが、東芝やサントリーなどラグビーに強い企業などと連携して、スポーツに関する情報発信の場として使っていくことも考えられます。もちろん日常的にお茶を飲む場になってもいいでしょう。「はなれ」は常に新陳代謝を繰り返しながら、府中の街に必要な場を随時提供していく、そんな庁舎になればと思っています。

（上田）

公用と公共という切り分けが必要というところもあり、きちんとしたセキュリティがなければ、開くことができません。開くためにはきちんとしたセキュリティが必要です。それが相反することもあります。今まで市民ロビー空間を庁舎と一体の空間として作ったりすることも色々設計してきましたが、それだとなかなかセキュリティの問題が解決できなかったりして、うまく開けなかったりすることがありました。こういったことも踏まえて、今回ははなれというものを上手く、使いやすいスペースとして作ることで、市民協働が進展するのかなと考えています。

（田中）

逆にいうと、はなれを切り離すことによりおもやのセキュリティをしっかりとれるようにして、日常の行政機能にしっかり使えるようにという話にも聞かれますが、一つの意見として、おもやの行政機能の部分は、高齢者支援も含めて相談する場所になるので、プライバシーがちゃんと守られているかを心配するご意見もあります。そのあたりはどう考えていますか。

（上田）

市役所は市民の意見を聞くところだと考えているので、書類を発行したりする手続きに来るところから、今後は相談に見えたりなどする機会がすごく増えて行くと思います。そういう意味ではプライバシーへの配慮が必要な部分もあり、窓口のあり方についても今までのオープンなカウンターだけではなく、相談がしやすい箇所をつくっていかないといけないと考えています。そういったところは今後市の運営側と相談しながらつくっていきたいと考えています。

（田中）

今設計者の2人から、日常的な使い方のなかでの可能性について、少し補足をしていただきました。次は、高野市長にお伺いしますが、市長は市の代表であり、色々な形で市のことをよくご存知で、地域の方々のご意見も長い経験のなかで拾いあげていただいての今回庁舎を作られることになるかと思いますが、

今もいろいろありましたが、府中市らしい庁舎のあり方、今のご意見を踏まえてなにかありましたらお願いします。

(市長)

冒頭のあいさつと重複するかもしれませんが、設計者には市民の方や関係の方から立地について話があったとのことですが、やはり現在の敷地、大國魂神社に隣接する土地での建替えということが市の職員のなかでも、市民検討協議会の議論においても非常に多い意見でした。これはやはり千数百年の歴史をもつ大國魂神社を中心とするあのエリアの歴史を感じるということが府中市らしいという、まず一つの大きな要素になるのではないかと思います。私はよく市民の皆さんの前で、特に中心的なエリアにおいて話をすると、大國魂神社は、先人達が我々に残してくれたセントラルパークだと話をすることがよくありますが、緑というのはかけがえのないものですし、それと調和のとれる庁舎というものが歴史、そして緑、これが府中市らしい魅力の発信ということになると思います。もう一つ、執務を行う職員、利用される市民、これはお互いそれぞれに別にあるのではなくて、相互にやりとりというのが第一となります。

新庁舎に懸ける想いは、市民協働と一言で言ってしまえばそれまでですが、市民のみなさんと行政の間に信頼関係を作っていくことが大事だと考えています。ややもすると、行政側で自分達がマニュアルどおりに進めていくことにこだわる、市民は自分の想いを伝え相談していききたい、そこがどうしても溝ができてしまいます。そこを解決していくためには、開かれた執務空間というのはもちろん大事ですが、ユニバーサルデザインに基づいた設計、プライバシーが確保できる空間をつくるのが非常にこれから先不可欠ではないかと思っています。

(田中)

当初、前半で日常的な使い方について聞き、後半は災害時の使い方について聞こうと思っていましたが、思ったより前半の時間が残っていますので、少し話を拡張して意見などを伺いたいと思います。

倉田氏にお伺いしますが、審査のときに33案があり、私達も選定をご一緒する過程でいろいろ苦労しました。千葉さんは建築家として珍しく、建築は背景で、控えめで良いとおっしゃっていますが、逆にシンボルを作るという提案の方もおり、シンボリックな案もありました。あるいは、大國魂神社に近いので環境をテーマに出すという案もいくつかあったように思います。会場からいただいた意見を見ると、今回の提案の目玉はなにか、環境に関しては、地球温暖化が問題になっているなかで、どのように考えられるのか、例えば、太陽光

発電や井戸まで含めた環境配慮はどうなっているのか、非常に環境配慮の技術が進んでおり、日進月歩なので、7年先は、こういうのが進んでいったらこれからはどうなるのか、建物だけでなく、建物の外構も含めたランドスケープのデザインに関係するのではないかなどの意見があります。このあたりについて、審査の際にどのように考えたのか伺いたいと思います。

(倉田)

今回設計者を選定するに当たっては、今の話はかなりポイントだったと思っています。立地を考えたときに、従来の庁舎はややもすると、行政の権威の象徴という形で庁舎をつくるケースも多かったと思います。市民協働の場としての庁舎であったり、市民に開かれた庁舎、市民と行政とを繋ぐ庁舎となると、おのずと建物の姿も変わってきます。それが新しい時代の庁舎という意味でもあると思っています。

最近、シビックプライドという言葉が使われますが、これは暮らしている人達の誇りという意味ですが、従来の庁舎は、行政や首長の誇りが庁舎に象徴されていることがありました。今回の案は、市長の考えでもあると思いますが、権威的でない新しい庁舎の姿を求めた結果だと思っています。特に大國魂神社の隣にあるので、神社と競うような建物をつくっても意味がありません。市民がそこを使うことで市民が誇れる庁舎になってくると思います。皆さんが思われているような従来の庁舎のイメージと少し違うと思いますが、今回そういう庁舎を選抜すべきではないかと審査員も思いました。また、具体的な選定に当たっての議論のなかで、建物の高さの話もありました。シンボリックに執務空間を高いタワーで組み立てるような、非常に魅力的な案もありましたが、最終的に審査員のなかでは、あの場所にはそういう選択ではないのではないかと考えました。

また、環境の話ですが、現在色んな意味で環境技術が発達していますが、今回のような低層にすると、人工的な環境技術を取り入れるだけではない、自然環境を活かした府中ならではの庁舎というものができるのではないかと。大國魂神社というまとまった緑が隣接していますので、冷氣塊と言われるような冷たい空気の塊を上手に庁舎の敷地のなかに取り込むことによって、これからの時代に相応しい環境に配慮した建物になってくると思います。これから色々細かい点は検討されると思いますが、これはかなり期待する部分だと思っています。

(田中)

倉田氏の話で、一つは市民と行政の関係のあり方について、これからの庁舎のあり方があるのではないかと、もう一つは、環境への取組についても、むやみ

に先進的な技術だけをどんどん取込めば良いというのではなく、この場所に相応しい環境への配慮の仕方みたいなものが話としてあったと思います。次にこれらの点について設計者に伺います。この案をつくるスタディの中で、色々な案を練られたと思いますが、現地で建替えるということで順番に庁舎を壊して立てていくことをやっていかなければならず、ローリングを行う場合には、できるだけ仮設庁舎などの無駄を省いて、上手い順番で建替えながら最終的に良い形にするという庁舎を造らなければいけないわけで、我々も非常に難しい問題をお願いしています。そのため、設計する側は苦労をされていて、そういうスタディの過程で色々な案を試して、最終的に今回の案に落ち着いたと思いますが、プロセスの苦労話も含めて、どのように低層の案で大國魂神社と上手く関係を作れる案を目指したのか、もう一つは環境配慮のあり方として、隣に大國魂神社があるという中でどうしようなところを目指したかをお話ください。

(上田)

基調講演のなかでも大國魂神社からの風の流れをシュミレーションしたものを説明しましたが、このプロポーザルが始まったときに大國魂神社も訪れましたが、少しひんやりとした空気感がありました。この豊かな緑から発生する冷気というものを極力建物に取り込んでいくことはアイデアとしては必要だと考えました。環境技術というものをプリミティブに大気や自然採光を取り入れるといったところに尽きるので、これをいかに建築に上手に入れるかが課題になります。最新の技術を入れるだけでなく、プリミティブなところも上手く入れることが大事だと考えています。そんな中でこの通り庭が非常にヒットしたところがあり、人の流れと併せて自然の風の流れも感じられる通り庭ではないかと思っています。ただ単に通過していくような場所になっておらず、少し折れているようなところがあるので、それが制御的に上手くいくというように考えています。建物の間を風が強く流れすぎないような工夫がけやき並木と併せて必要になってくると思います。

建替えの手順については、非常に大変であり、行政に必要な規模というものをいかに低層に入れていくのかというのがポイントになり、これについては千葉氏ともかなり喧々諤々と議論をしたと記憶しています。極力低層に抑えたいが、規模を取らなければいけない、公衆災害の防止を図り、安全で使い続けながら建替えていくところが非常にポイントになりました。低層で実現できることを目指して色々検討を進めました。

(田中)

千葉氏に伺います。スタディの段階でかなり案を作成したと聞きましたが、そのへんの苦労話を含めて、どのように最終案に辿り着いたかについても伺えますか。

(千葉)

僕達はいつも案を検討するときに、最初に何かスケッチを描いてこれでいこうという感じではありません。むしろこの土地にどのような場が相応しいか、庁舎は本来どうあるべきかなど、あらゆる可能性を検討します。プロポーザルの提出までの期間はあまり長くありませんでしたが、50 案くらいは検討したと思います。その中で当然タワーのように高い建築で効率性を上げてはどうか、あるいはなるべく低層で敷地一杯に広げて上下移動を減らしてはどうか、また、敷地中央に広場をつくってはどうかなど、山のように検討しました。いつも何か1つ案を思いつくと、もうこれしかないと最初は思うのですが、議論を重ねるうちにやはりこれは府中らしくないのではないか、働く環境として快適でないのではないか、あるいは維持管理にお金がかかるのではないかなど、様々な観点で検証します。その中で最終的に残ったのが、なるべく低層でいこうということと、「通り庭」を庁舎の中心に据え、いつも市民が集まれる場にしようということでした。ここでお祭りが繰り広げられたり屋台が並んだり、コンサートが催される場自体が一番のシンボルになり、しかもそこが日常的に使われるのが一番良いということでこの案になりました。この案で大丈夫だと確信するまでに、非常に時間がかかったプロセスでした。

環境的なことですが、今はたくさん環境技術があります。少し前だと太陽光を使うことも、そう簡単ではなかったのに、今ではごく普通にできるようになっています。その意味で、7年後にこの庁舎が出来る頃までには、さらに新しい技術も出てくるはずです。そういうことは積極的に考えていかなければいけないと思いますが、一方で環境は、ある意味非常にプリミティブなことだとも思います。なるべく余計なエネルギーを使わない、それは当たり前の技術で実現できることでもある。例えば、高層化していつもエレベーターを使わないと移動できないという働き方を強くないということも、もしかしたら大事な環境技術かもしれない。あるいは普通に窓が開く、ということもそうです。特に東日本大震災以降、窓が開かない建物がどれだけ使えなかったかということは大きな教訓の一つだと思います。ちゃんと窓が開く、そういう当たり前のことを着実に行うことが必要でしょう。もう一つ、環境問題の根幹は、一人一人がどれだけ環境にセンシティブになれるか、ということにあると思っていますが、この建物がそのセンシティブティを高める役割を担えるといいと思っています。例えば、風が吹いたり光が差ししたりといったことが、並木のざわめきや木

漏れ日の美しさなどを通じて顕在化し、自然の魅力に気づく場になるといい。そういう体験を通じて、環境を大事にしていこうと思う気持ちを育てていくことも、環境問題を解決する大事な技術だと思っています。

(田中)

先ほど倉田氏が選考の過程の話をしていましたが、おそらく今回の設計者の案が初めから断トツではなかったと思いますが、丁寧に見ていくと、噛むと味が出るというか、徐々にその良さが光ってくるようなところがありました。それは、今ご紹介いただいたようにやるべきことを丁寧にスタディされた結果なのでしょう。環境技術についても単に先進的なものだけを追いかけるのではなく、プリミティブな、あるいは素朴なおっしゃっていましたが、そういう地に足をついたことをしっかりやっけていこうという姿勢がありました。それらの点がもしかしたら、府中らしい、ここにしかないような歴史的な時間の積み重ねを持っている場所の魅力と上手く繋ぎあう要素かもしれないという感想を持ちました。

それを踏まえて市長にコメントをいただきたいのですが、さきほど、大國魂神社は先人が残したセントラルパークとおっしゃっていました。また、職員と市民の信頼関係が大事で、そういうものが醸成される場所として庁舎を捉えたいとおっしゃっていました。今回選ばれた案の庁舎の姿は、ものすごく最先端であったり、シンボリックなものではなく、府中らしさを別の形で表しており、そういうような市庁舎を建てるということは、ある意味で、一つ新しいメッセージになるのではないかと思います。今の説明を聞いて、市長が考えている庁舎の姿とどういう風に繋ぎ合えそうなのか、あるいは、こういうことも考えたほうが良いということがあればお願いします。

(市長)

先ほど設計者から、シンボリックな建物を建てることも初めは案にあったという話でしたが、私も今こうなってそういう風に思うのかなと思ったり、いやもともとそうだったかなとも思ったりしますが、庁舎に何を求めるか、あるいはもう少し広く言えば、建築物に何を求めるかということですが、これは庁舎であるからこそ、建物になにか魅力を求めるのではなく、その建物、庁舎に集う人々に輝きや魅力を求めたいということが、今非常に原案が納得できるというか、嬉しいところだと思っています。多くの人々、多世代の方々が、ここに集まってきて、目的は色々ありますが、事務的なことで来る方ではなくて、ここで憩う場であったり、あるいは、情報交換の場であったりそういう賑わいの場としての新たな創出、しかも、市役所は土日祝日が休みであり、現在の市

庁舎は、土日に婚姻届を出しにきたり、あるいはカードで住民票を出す方々はいますが、ほとんど人々が行き交うことがない休館状態となっています。セキュリティの課題はありますが、おもやとはなれということで、はなれを365日市民が利用できると考えられるとすれば、これが庁舎や街への愛着につながっていくと考えています。

環境については、これから庁舎を考えると非常に大きな課題ですし、率先して取組んでいかなければいけないというのが市役所の責務であるとずっと考えています。例えば、エネルギーなどの太陽光を利用するなど、ベストミックスのエネルギーが提供できるような庁舎でありたいと思っています。ただ、そればかりではなく、自然との共生を一人一人の市民がいかに気づき、それぞれの生活において、自然に対する負荷がないような取組をしていく、そういうことも千葉氏から話をいただいて大変ありがたいと思っています。

(田中)

一時期はハコモノという言い方で建築が批判される時期もありましたが、そういうものだけを目指すというのではなく、逆にそれが支えるところの市民の考えが大事だという市長の考えは、おそらく府中市の市民の考えを広く反映したものだと思いますが、今回の府中市の庁舎に見られる府中らしさに繋がっているのかなという感想をもちました。

そろそろ時間も後半に入ってきたので、少し話題を変えたいと思います。平常時の話がありましたが、庁舎は日常開いているときではない使い方もあります。そのうちの一つの大事なポイントとして、災害時の対応にどのように庁舎、あるいは庁舎を含めた空間が使えるかということだと思います。プロポーザルで案を求める時にもこの点は重視した点で、一つは庁舎の耐震の考え方、あるいは、仮に災害が起きたときにどのように庁舎が使われるのかという点です。地震や他の災害かもしれないが、最近は気候変動なども目にすることがあり、おそらく市民の方も過去10年くらいの間に色々な災害に見舞われた方の様子をテレビでご覧になったり、あるいはボランティアなどで足を運んだりした人もいるかもしれません。そういうときに庁舎は街の真ん中に位置するので、ある役割を期待されるだろうし、そのような災害時にどう備えるのかがあると思いますが、まず倉田氏からこの辺のポイントについてお話いただきたいと思います。

(倉田)

非常時の使い方については設計者から細かい話がありますが、私は多少防災の街づくりなどにも携わってきたので、阪神淡路大震災のときの教訓として、

いくら防災の拠点や避難場所として指定していても、日常的にあまり馴染みのない場所や施設は非常時のときに実は役に立たないということを感じています。そういう意味で庁舎も市民にとって日常的に身近な施設であることが大事で、災害時にもすぐあそこに行こうとなり、そこに行くにしても、常に使っている場所であれば、簡単に行くこともでき、そこに行けばこういう情報が手に入るということも分かります。今回の施設づくりのなかで、災害対策を目的とした機能を備えているということとは別に、庁舎が身近な施設になることで災害時の拠点になると感じていて、期待したいところです。細かい部分については、設計者から改めて伺えれば、皆さんもご理解いただけるのではないかと思います。

(田中)

今の点については、市民の方からも、耐震免震の考え方に対するご意見があったり、あるいは、災害時に実際どういう風に使えるのか、それにどう備えて色んなものを準備しておくのかという意見があったりしますが、これについては設計者としてどう考えますか。

(上田)

災害となると、地震をはじめ風水害や土砂崩れ、大規模事故など色々なものが想定されますが、昨今歴史的な大震災となると、阪神淡路大震災がマグニチュード7.3、東日本大震災ではマグニチュード9.0という大きな揺れとなりました。府中市の防災計画でも記載されていますが、マグニチュード7.3以上、震度6強と想定されているような首都直下型地震は、内閣府の中央防災会議で発表されている数値をみますと、ここ10年間は30%以上、ここ30年では70%くらいの確率で起こると言われています。これは非常に高い数値であり、この際に庁舎はどういった役割を担っていくのかについて我々も考え、提案させていただきましたが、大きくは3つあるのではないかと思います。1つは、庁舎は安全安心のシンボルとなるように災害時の災害本部の司令塔になることが必要だと思います。2つ目は災害の支援機能ということで、ボランティアの受付だったり、復興の相談窓口だったりなどがあります。3つ目として、日常の市役所機能を止めてはいけないということで、継続できることが必要だと思っていて、これら3つの機能を備える必要があると考えています。地震の発生確率が非常に高いと思っていますので、この庁舎が防災拠点となるには現在信頼度が高い免震構造を採用することを提案しています。免震構造は地震の揺れを低減でき、それだけではなくて、東日本大震災でもあったように天井からの落下物をなくすなど二次的な災害を防ぎながら、ここは指令する場所

として機能していくということを考えたいと思います。倉田氏からも話がありました。防災専用のスペースを設けることは面積の規模なども考えると難しいということがありますので、日常使っているスペースを災害時にきちっと転換できる造りをして有効に使っていくことが必要だと思います。それを維持していく、使い続けていくためにはエネルギーの問題も含めて自然エネルギーを有効に活用することにも繋がり、防災時に使える庁舎は、エコな庁舎であると考えています。

(千葉)

上田氏に説明していただいたとおりですが、自分自身も東日本大震災以降、東北の復興支援にいろいろな形で関わり、そのプロセス自体も共有していますが、改めて感じるのは、例えば避難経路一つにしても、日常的に使用して身体化されていないと駄目だということです。災害時は、皆さん大変な状態に置かれているから、いくら避難方法、避難場所を頭で理解していてもうまく機能しない。直感的に逃げられるか、体にこうした行為が染み付いているかがとても大事なことです。先ほど倉田先生からも話がありましたが、日常的に市民の方々が通り庭を通り抜けて、庁舎がどんな場所であるかを生活の中に織り込んでいくことはかなり大事な事だと思っています。また、災害時に一番活躍している建物は、体育館であるということも、着目すべきことかと思います。避難所や物資の搬入場所として使われていますが、それは空間がフレキシブルだからこそ可能なことです。もちろん、庁舎に体育館をつくるわけにはいきませんが、災害時に物資の搬入や一時的に別の用途に転用できる場所は考えておく必要があると思います。このようにフレキシブルに使える場所があることは、庁舎にとってかなり重要で、「おもや」は執務空間で家具などもあり難しいですが、「はなれ」がそういう場所として機能してくれるといいと考えています。また災害時には電気もガスも供給が途絶えてしまうかもしれませんが、そういう場合にも建物が機能するかどうかも大事なことで、今回の案は低層なので、頑張れば階段で移動できる。エレベーターを使わないと機能しないという電気エネルギーに頼った案にしなかったのは、そのためでもあります。また職員の方々の安全な避難のためにも、この建物は、体感的に非常に分かりやすくできています。とにかく窓の方向に向かって逃げれば安全に避難階段に辿り着くというプランです。それも併せて考えていたことです。

(田中)

日常的に使っている場を災害時にも上手く使っていくこと、また、最後に千葉氏から、はなれと通り庭を災害時に大きく転換して使ったらどうかという提

案がありましたが、災害が起こったときはまさに市長が中心に、庁舎が拠点となると思います。今の話を聞いて、災害時の庁舎のあり方について市長の考えがあればお願いします。

(市長)

東日本大震災はもとより、自然災害が非常に多発しているのが近年の特徴で、地震もそうだが風水害も各地で起きていて、大きな被害を受けている方々の気持ちを考えると心が非常に痛むことが多いです。府中において自然災害が想定できないということではなく、先ほども話がありましたが、30年以内に震度6、7以上の大地震が起こる可能性が7から8割と言われていまして、富士山の噴火の心配の声が聞こえてきています。そのため、これから、いつまでというのではありませんが、自然災害の発生をいつも念頭において仕事を進めていかなければいけないと思っていますし、首長の災害時の初動、そしてリーダーシップがなによりも強く求められていることが私にとって非常に大きな責務だと考えています。一方で庁舎を考えると、まずは、大地震を想定しなければならない、その際に市役所のなかにいる市民や職員を守ることがなによりの課題であり、さきほど話がありました免震構造やエネルギーの供給のあり方、あるいは建物の高さを抑えたことによる利点については、ぜひ実際の基本設計でも取り入れていただきたいと思います。また、復興の拠点として、継続して事業を止めることなく進めていくわけですが、そのことも想定したエネルギーのあり方などについてもしっかりと今後議論を重ねていきたいと思っています。

(田中)

有事の時の姿について話を伺いましたが、残り時間が5分程度となりましたので、皆さんから一言ずつ、今後の進め方やあり方についての話を伺ってシンポジウムを閉めたいと思います。一つは、庁舎が完成するのは7年後ということがありますが、今回プロポーザルで案を選んだというのではなく、案を念頭において設計者を選んだということです。これからの7年間のプロセスの中で設計が進められて行くこととなります。場合によっては必要な変更がされていき、工事に移ってローリングで建替えが行われていくということになります。今日お見せした案がそのままできるというのではなく、これから色々な状況を見ながら、あるいは対話を進めるなかで変えるべきところは変えていくことになると思いますが、そのあたりの考え方や抱負について伺えればと思います。アンケート等も見ていきますと、東京オリンピックに向けて建設費も非常に高騰していますので、事業費を心配するご意見もあり、完成後のランニングコストも含めてどういう風に考えていくのか、今回はなれや通り庭に市民の

協働の場をつくっていくためにどういう対話が必要かという意見もありますので、このあたりに関する抱負とコメントをいただきたいと思います。

(倉田)

中身については設計者に委ねることだと思いますが、今回プロポーザルの審査委員長として冒頭でも申しあげましたように、プロポーザルは案ではなく設計者を選ぶといっているのはありますが、やはり設計者を選ぶ際には、どういう考えでどういうビジョンを持っている設計者かというのがポイントです。今日のシンポジウムの意義としては、もちろん案を通してということではありますが、こういう思いを持っている方が今後設計していくことになることを市民の方に理解していただくことが非常に大事です。十分に経験があり、技術的にもこういう規模のものを実現できる力を持っていて、なおかつ庁舎に対してこういう考えを持っている方、というところで設計者を選びたいと考えていました。案が必ず変わってしまうということではありませんが、これからのプロセスも大事だと思っています。特にプロポーザルの際に設計者に示した条件は非常に限られたものですので、これから実際に庁舎を使用する職員や市民が色々な意見を出しながら、関係する人それぞれにとってこの庁舎で良かったというところを持っていかなければなりません。時間の制約はありますが、今回たまたま使いながら建替えるということで通常の庁舎建設よりは時間がかかりますので、その時間を使って十分に市民とも議論し、どういう形で市民に関わってもらいかも含めて、これからの設計、建設の過程でそういうプロセスを踏んでもらえれば良いと思います。そうすることで、この庁舎が理想としている市民に開かれた市民協働の場としての庁舎になっていくと思います。そういうことをやってもらえる設計者を選べたと思っていますので、ぜひ期待しています。

(田中)

設計者は最後に話してもらったほうが良いかと思いますので、先に高野市長に今後7年間に向けた設計者への期待をコメントしていただいて、その次に上田氏と千葉氏からコメントをいただきたいと思います。

(市長)

まず、本日シンポジウムにたくさんの方に来ていただいて、市民の皆さんの関心が非常に高いことを再認識させていただきました。しかしながら、25万7千の市民皆さんに庁舎の建替えについて広く認識をいただいて、新庁舎の設計の固まるまでの期間では、職員が中心となって、より市民の皆さんの身近なところで説明をさせていただきながら、より多くの皆さんのご意見を頂戴する

機会を作ることが最も大切な姿勢だと思います。また、もう1つとして、冒頭のあいさつでも話をしましたが、たしかに財政的な予算面での効率的な工程や工期についてもしっかりと研究をしていかなければならないと思いますので、設計者の知恵を最大限いただきたいと思いますし、市民の皆さんとの議論の場も、議会が中心となるかもしれませんが、必要だと思っています。非常に良い提案をいただいた、素晴らしい設計者の皆さんだと思っていますので、期待をしていきたいと思っています。

(上田)

私どもはJV（設計共同体）という形で設計を進めていきますが、プロポーザルという形で選ばれたこともきちっと踏まえて、府中市のパートナーとなるようにこれから7年間お付き合いいただきますが、ぜひ新しい庁舎をきちっとした形でお届けしたいと考えています。7年間となるとかなりの長丁場となりますが、その間建設費の高騰等もあるかもしれませんが、今後の状況に備えて、それぞれの段階でコストチェックを行ったり、皆さんのご意見を頂戴する場を設けたりしながら進めていきたいと思っています。それは設計だけでなく、現場の施工段階も含めて、市民対話という形で進めていきたいと考えています。

(千葉)

今日この場で、ある意味では初めて案のお披露目をさせていただいたことになります。おそらく皆さんも様々なご意見を持たれたことと思いますし、そこにはまだ自分たちが気づいていないことも多々あると思っています。僕たちは、建築の案というのは基本的には皆で育てていくものだと思っています。完成が7年後という、自分が何歳になっているが少々気になりますが（笑）、今後7年間、時間をかけてまずは案を育てていくということをきちんとやりたいと思います。そのためには、自分自身も府中の魅力をもっともっと発見していきたい。すでに毎週のように府中には通っていますが、今後さらに府中の様々な場所を訪れて、好きなところを発見したいと思っています。

また、コストのことは皆さん当然気にされていると思いますが、僕達は、今までコストに余裕のある仕事はほとんどやったことがないんですね（笑）。どちらかというと厳しい仕事がほとんどです。だからコストをかけなくても魅力的な場は作れると日頃から思っていることもあり、そのへんは安心していただいて大丈夫ではないかと思っています。あと、通常建築の設計をやっていると、建物が出来上がるまでが仕事ということになりますが、自分自身は建物がその後どう使われていくのかについても、いつも大変気にかけています。建物はやはり

たくさんの人に積極的に使われて、使い倒されるくらいが幸せなことだと思います。そのために僕自身は、イベントの企画に関わったりして、その建物をどう使っていったら良いかを一緒に考えてることをやっています。おそらくこれが完成する頃には、府中は自分にとっての第二の故郷になるくらい愛着をもって接することになっていると思うので、その後建物がどう使われていくかについてもなるべく関わっていきたいと思っています。

(田中)

ありがとうございました。今日こういう場で、選ばれた設計者の2人には案を紹介いただいて、色々議論を深めることができましたので、府中市に相応しい、府中市ならではの庁舎のあり方に対して、色々ヒントを得られ、理解を深めることができたと思います。また、対話による設計の姿勢を示していただいたので、今後ある意味7年間のお付き合いが今日から始まるということで、7年のプロセスを経て、人が集まっていく場所として、府中市の未来を担う、未来をつくる場所として府中市の新庁舎ができていくことを願ってやみません。

短い時間ではありましたが、パネラーの方々には色々な意見をいただいて、非常に良いシンポジウムになったと思います。これでシンポジウムを閉会させていただきます。